

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	わらべうた等々力保育園
施設所在地	世田谷区等々力3-27-15パークハイム等々力3丁目巻番館
法人名	HITOWAキッズライフ株式会社

1. 活動のテーマ

<テーマ>

園庭遊び～身体の発達に合わせた遊具が促す遊びの環境～

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

毎年園庭で走る、登る、滑る、押す、跳ぶ等それぞれ身体の発達に応じた遊びが見られ、それらの育ちが伸び伸びと展開できる環境がある。そこに身体の発達を促す遊具を取り入れ、仲間と一緒に楽しい経験から遊びの環境に繋げていき2歳児の身体の発達の理解を深め学び探求していきたい。

2. 活動スケジュール

9~10月導入前の子どもたちの身体遊びの現状を把握していく。事前にイメージできるよう子どもたちにも伝えていく。9月11日鉄棒導入。子どもたち、職員も一緒にインストラクターの方から、ただぶら下がるだけでなく、友だちと一緒にの遊びに繋がるバリエーションをまなぶ。

9月子どもたちの興味関心、遊び方の変化、身体の使い方などを観察、子どもの姿、子どもたちのやり取りを振り返り等で拾い上げていき次の発達と環境設定を検討

10月27日全身でぶら下がったり、上ったり下りたりする姿から園庭に木製ジャングルジムを設置。製作途中の様子や設置後のレクチャーを施工者から受け、友達とイメージの共有を積み重ねることを楽しみにする取り組みに繋げていく。

11月友だちと一緒に楽しむ動きや、そこから始まる小集団の遊びに注目していき、身体の発達への理解に照らし合わせて観察をしていく。]

12~1月砂場での工事現場ごっこ、ボール遊び、縄跳び遊び等でのやりとりから、それぞれの遊びが広がる遊具を導入。(大きなスコップ、くまで、ボール、縄跳び) 道具を使った体の動き、力のコントロールの様子を観察。やりとり、関わりの中から育とうとする姿を読み解き環境を改善していく。 1月

活動のまとめ

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

園庭遊具：鉄棒、木製ジャングルジムを新しく設置。全身の力を使ってぶら下がったり、上ったり下りたりすることができる環境を常設する。 遊び

の道具:大きなスコップ、くまで、ボール、ボール入れ、縄跳びを購入。子ども同士の遊びを広げ、半歩先の発達を促すきっかけ作りをする。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

1. 園庭での遊びの中からそれぞれの身体の発達に照らし合わせ、必要な環境を検討する。
2. 仲間と一緒にぶら下がりのできる環境を作る。→一緒に動きを楽しむ中それぞれの身体の使い方や、遊びの広がりを観察する。
3. 全身を使って高さのある所に登ったり下りたりする環境を作る→体のバランスを取る活動の中発達に照らし合わせて集団遊びにつながる環境を検討する。
4. 道具を使って力の加減をコントロールする動きを取り入れた遊び、簡単なルールのある遊びができる環境を準備→遊びを観察し、半歩先の発達を促すきっかけを作り、子どもたちの遊びの広がりを拾っていく。
5. 園庭での体遊び環境整備が、2歳児クラスのどの様な発達を促したか、振り返りまとめる。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

全身を使って園庭での遊びを友達同士でのびのび楽しむ中、仲間と一緒にぶら下がりの出来る鉄棒を常設。片手を離してみる、足を引っかける、横の支え棒の方から鉄棒に持ち変える等様々な動きが見られた。友だちの姿に誘発され自分なりに工夫し試行錯誤しながら体を使い、ぶら下がりから始まる様々な動きを楽しみ、それぞれの出来た。の自信が積み重なっていった。子どもたちの「出来たよ。」「～ちゃん、こっちでやろう」のやりとりが盛んになり一緒に楽しむ姿があちこちで見られるようになった。木製のジャングルジムを設置すると、目線が変わる事を新鮮に感じ、自分の力で登る降りるを楽しみ「見て高いよ。」「今登っているから待っててね。」等バランスを取る、危ないを察知しながら全身で動く。を楽しんでいた。並行して園庭での遊びの中で保育者と一緒に経験した動き、遊びを友だち同士で楽しむ姿が盛んに見られるようになってきた。砂場では、保育者と一緒に砂山を作る遊びの中で、自分たちで大きな穴を掘り工事現場ごっこをする遊びが継続。そこで自分たちで使える大きなシャベル、熊手を使って、砂を持ち上げたりバケツに砂を入れる等の大きな道具を使って力の加減をコントロールする動きを楽しんでいた。。ボールを使った大人とのキャッチボールの経験から、自分たちだけで試行錯誤しながらキャッチできる距離、タイミングをやりとりしながらやっている姿が見られた。親しみを持って遊びを深めていく姿が見られる中、ボールを高く投げ鉄棒を超えたら成功。の自分たちでルールを作って楽しんだり、縄跳遊びでは自分が持って友だちに飛んでもらったり、くぐったり、自在に縄を使いの自分たちでやり取りする遊びに広がっていった。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

活動に取り組む前には木に登ったり、木製の滑り台の下から全身を使って登ることを楽しむ児がいた半面、友だちの姿を見て挑戦しようとしてもできない、自分には無理と断念してしまう児もいた。半歩先の環境を常設すること、それぞれの発達に合わせて応答的に関われる遊具の選定ができた事で繰り返し挑戦する意欲が育まれ、自信に繋がっていき、子どもたち同士のやり取りも盛んになっていったと感じた。1日の生活リズムの中で全身を使い開放的に体を動かすことが発達として保証されること。一人ひとりの発達の違いがある中で、友だちと「一緒に」、「一緒に」やってみたい。の意欲が育まれる環境を保育者、子どもの1対1方向のやり取りだけでなく、仲間とのやり取りも通じてより有機的に一緒にデザインすること。経験の中から一緒に遊ぶ楽しさがうまれ、広がる喜びが重なる園庭環境を今後も探求していきたい。